

2013 年度立命館大学校友会 東日本大震災復興支援事業
東北応援ツアー レポート

「現地を訪問して想うこと」

93 年産業社会学部卒 永野香里

A 岩手県コース

この企画に参加するちょうど一年前、家族で宮城県を訪れ、津波の爪跡を目の当たりにする機会がありました。しかし今回、そのとき以上に深く心に残ったのは、やはり現地で被災した方、ボランティアにかかわった方の話を聞いたからだと思っています。

陸前高田でボランティアの方が掲げた、津波が来る前の商店街の写真は、私たちが普段暮らす町の商店街と似通って見え、それがよけいに目の前に広がる草生い茂る更地との落差を思い知らされました。岩手県校友会の方々の当日の体験談からも、それはひしと伝わってきました。津波の恐ろしさ、それによる被害、今後の復興計画などは繰り返しマスコミなどで報道され、それだけで知っていると思ってしまうのかもしれない。でも本当はそこに、人々の当たり前の暮らしがあったこと、当たり前の人生があったこと、そして何もかも失ってしまっても、一から当たり前の生活を築いて行かなければならない、ということにまで、なかなか思い至らずに来たのではないか。被害の大きさの前に、現実としてそこにまで想像が及ばなかったのではないかと痛感しています。

奇跡の一本松の保存にも多くのお金がかかることに、私自身も疑問を感じていましたが「それでもあれは、たくさんの人々の希望だったんです」とのひと言に、復興というのは、ただ建物や道路を造り直せばいいというだけの話ではないのだと、改めて感じました。

それをふまえた上で、では何ができるか。私は何をすべきなのかと、以来ずっと考え続けています。ボランティアに求められる内容も日ごと変わってきていること、その上で、まだまだ継続的な支援が必要であることは「大槌刺し子プロジェクト」の学習や、遠野まごころネットの方の話からも、知ることができました。

現地に足を運び、話を聞かなければ見えないものがある。支援という、どこか身構えてしまう言葉で表されることばかりではなく、美しい自然やあたたかいもてなしに会うため（ここに私はすっかり魅了されてしまいました）にも、細く長く、関わっていかなければならないと思っています。